

山里の茶屋と學問の日本の形態

堀内 他次郎

大東亞戰局の時々刻々に變轉擴大し熾烈を極めつゝある現下、身を學道に獻け、思を青史に潛める我々の胸中に常に迫り來るものは、實に此の際に處すべき學問形態の省察があると思ふが、特に國史の研究に携はる者に取つては、過去に於ける斯の如き事態に臨んでの我が祖先先輩の處した蹤迹を尋ね求めることも一の學問的使命であるかと考へられる。我が祖先は古くは大陸に於ける隋唐帝國の強盛と其の脅威、更に蒙古の襲來、近くは幕末明治に於ける歐米列強の極東政策に對する防衛に於いて、何れも未曾有の危機を體驗克服し、其間に於いて常に新なる學問の興隆と飛躍を成就し得た。併し此處に問題と

せんとするのは其等國家存立の危局の場合とは稍と趣を異にし、斯の豐太閤が朝鮮大明更に南方圏をも皇恩に浴せしめんとの雄圖を抱き、國民また勃々たる海外發展の壯心もだし難く、上下一致して征明の軍を進めた此の時、對外の戰事には携り乍ら、正に八紘を掩ひて宇とせんとする積極的な發展を志すの時に當り、我が學問の精神が如何なる形に於いて顯現し發揚せられたかの問題に就いてである。これに關し先づ挙げようと思ふのは、秀吉が明國の不遜を責めて再び半島に旗鼓を進め、外、鷄林八道を其の威風に靡かせつゝ、内にあつては伏見桃山の城池を築き、天守以下諸樓、諸殿も漸く周備した慶長二年十月に、恰もその一廓に構へた「學問所」に就いての記文である。此の「學問所記」は有名な五山の學僧であ

り、太閤の身邊に侍して文筆の事に携つた西笑承兌の述作にかゝり、その語録である「南陽稿」^①に收められ、弘く著聞せられて居るものと思ふ。此の記の成立の事情に關しては幸ひ承兌の日録である「日用集」^②に見えて居り、即ち慶長二年十月十八日、彼は伏見に赴いて秀吉が普請場を巡視するに従ひ、其の午後、舟入御殿に到り、更に此の學問所で飯を喫したのであるが、此の事のあつて數日後「學問所記」下書用の襖障子が彼の手許に送り届けられたことよりすれば、恐らく此の日、命を受けて實地の檢分を遂げたものであらう。而して同じ二十六日には秀吉が大崎少將の亭に成り、その書院で雜談を試みてゐた節に、承兌が秀吉の御前に於いて此の記文を読み上げた處、太閤の意に適ひ、早速縦間中横^{まなか}一間二尺の襖障子に清書し、これをその樓門に掲げて高覽に備ふべきの命を受けた。此の樓門とは恐らく記文中に「出^ニ草堂^ニ數歩、別有^ニ重門^一、入^ニ門内^一則有^ニ高堂^一、名^レ之爲^ニ學問所^一と云つて居る重門に相當し、學問所を仰いで門を入らんとする者に對し、先づ此の境に立つる精神を何人にも宣り知

らせんとする秀吉の意圖よりして述作せられたと考へてよからう。

正に此の様な趣意よりして承兌は此の記の冒頭に秀吉の成就した世界の霸業より筆を起し、「大相國出^ニ季運世^一、開^ニ闢洪基^一、數年之中、歸^ニ盡扶桑於掌握^一、自^レ東自^レ西自^レ南自^レ北款塞來享、如^ニ朝鮮^一者、以^レ有^ニ不義^一、征^ニ伐之^一、如^ニ大明^一者、聞^レ風來朝、仁政之美振^ニ一時^一、勇武之名聞^ニ四海^一、所作已辨、功勳盡畢」とよく秀吉一代の不績を要結し、將に此の時に於いて政務の暇、山城伏見の城廓殿舎の工が營まれ、此處に學問の庭が作り致される所以を説くのである。而して此の學問所の機構景致と此の境中に興る寮園氣、更にこれに昇つて眺め得らるゝ、四圍の展望景觀を委曲を盡して叙べた後、最後には再び「外作^ニ勝遊^一、而内不^レ忘^ニ干戈^一、縱雖^レ屬^ニ大明朝鮮於麾下^一、亦其志猶有^レ餘、上古無^レ可^ニ比量^一之良將、後世盡有^レ之耶」と現に慶長の役を進めつゝある英雄の雄圖を思ひ讚へることに結んで居る。此の學問所が凡そ斯の如き精神と共に來るものなればこそ、翌慶長三年明の使節の來

朝するや、秀吉はこれを伏見の城に招き寄せ、饗應を盡して後、此の山里に於いて茶を呈したことも、當に然るべき理由を持つと考へられる。

併し、此の様な意味に於いて此處に持ち來たされて居る「學問所」とは本來如何なる性質を持つものであつたかに就いて更に云はゞ、それは單に學問の名によつて直ちに考へられる様な講學究理の場處に止まるものではなく、また詩歌の吟詠に打ち興ずる庵室に過ぎなかつたのではない。否、寧ろ其等の意味をも併せ兼ねつゝ、それよりも強い意味に於いて茶室としてあつたに他ならなかつたのである。即ち承兌の記す處を見るに、先づ山に差しかゝる處に高閣があり、これを入れれば松徑が続き、林谷が重り、屏障で圍んだ如き境に入つて行く。稍々足の疲をも覺える程の處に一草堂があり、その四圍皆杉松が籠り繁り、夏は避夏冬は排寒によく、内に火爐あつて隨意に休息が出来る。此の草堂より數歩にして重門があり、門内に入ると高堂がある。之れ即ち「學問所」と名づくる所であつて、此處に於いては「大相國座箇中、集有道

名士、談茶經、翫茶器、論香色、賞風味、於是學問之徒、珍器取捨、瓶花生枯床、床上字畫、座中進止、欲究盡此道、難矣哉、臻其支與」と云はれる如く、これは秀吉を中心として茶の湯の圍居をなし、茶の道を共に究めようとする處であつた。尙ほ此の高堂の四方には茅屋(茅店とも記される)の構があり、夫々の屋中には宇治川の朝霧、伏見江の秋月、枕頭の夢を來雁に驚かしめ、或は閑居の懷を山風に添ゆると云つた和歌が賦されてあり、而して斯の中央に立つ高堂に昇れば、忽ち四隣の展望を自由にし、長堤うちつゞき、萬頃の井田には農夫が耕耘に勵み、百禽が飛翔亂舞する、所謂仁政の致、昌平の象を遙けくも見渡すことが出来、また四季の變遷、四時の烟霞、朝夕の變化等氣象季節の千萬の變遷を楽しむことも自在であつて、盧山瀟湘西湖等の名勝も到底及び得ないであらうかとなして居る。

伏見城内の學問所と云ふものが凡そ右の様な境致をなしてゐたとすれば、これに就いて直ちに想起せられるのは、現に京都東山の高臺寺境内の豐太閣靈屋の東に隣る

山上に存し、桃山城内の遺構を移したとの所傳を持ち、近時國寶に指定された「時雨亭」傘亭の二茶亭である。

今、其の概形を述べれば、先づ傘亭は略と二間四方の平面を持つ單層茅葺寶形造の小さい建物であり、入口の竈戸より土間に踏込むと、直ちに左手が稍高い一疊敷の貴人の御座となり、侍臣の坐る處は鏝形に六疊敷の廣さを持つ。尙、それに一坪程の板の間を附屬し、其處に竈を据ゑて居る。内に座して竹と萩を以て求心的に高く窄まる穹窿狀の化粧屋根裏の天井を仰ぎ、また外部より深く重厚な藁屋の葺き方を見ると、誠に神さびた深林に籠る思を深くし、心も自ら幽靜になるかの様に思はれる。此處に於いては斯の學問所記に云ふ重門外の草堂、或は高堂の四維にある茅屋の姿を思ひ、その精神をもよく味到し得るかとも思はれるのである。これに對比して、現在は石壁の廊下を以て傘亭に結ばれて居る時雨亭の方は重層の茅葺であつて、略と二間半と一間半の矩形の平面を持ち、階下は土間と板床の分部に相半し、土間には稍と大形の竈がある。階上は廊下より直ちに此處に上る構造

となつて居るが、これは三疊敷の廣さを持つ上段と三疊臺目程の下段の部分より成り、下段の部分には正面の壁に圓い下地窓の開いた臺目床があり、床脇の一隅にはこれまた同じく竈の設備を持つ。而して上段の部分の三面の柱間は吹き放しであつて、展望をほし、まゝにするこゝとが出来、此の場所より遙か淀の水郷の邊までも見晴るかすことが出来ると云ふ。柱や桁梁の構造、屋根の葺き方、屋根裏の意匠も一見傘亭に比し輕快であつて、學問所の高堂を是に考へ得ると思ふのである。

此の傘亭と時雨亭、乃至は學問所記に云ふ草堂と高堂の對照に於いて見る處は、兩者が同じく山家の形態を取りつゝも、一は求心的閉鎖的な閑寂の方向、他は遠心的開放的な暢達の方向を示すことであり、而も巧にこれを一境に統一して居ることである。この様な注目すべき茶境の樹立せられるには一には、日本茶道精神の至り極め得た結果があり、更には日本古來の強い精神的傳統が、取分け桃山の時代に強く興起することがあり、遂にこれを齎し來たことがなければならぬと思ふ。

而してこれに關して考へ得ざるを得ないのは、此の高堂の上に太閤を中心として茶經を論じ茶器を飭ぶと云ふ茶の湯の友をしも、「學問之徒」と云ふ點であり、それには今日の所謂「學」となすものとは異つて、賓主互換の茶境に宛ら「學問」が來るとする思念に就いてである。而して此の様な問題を説くには、今その由來する歴史的な諸關聯に立入つて、更に考究を要すると思ふ。

二

併し乍ら、秀吉が此の様な茶室を居城の一廓に構へたのは、もとより此の時に始まつたのではなく、寧ろ伏見城の場合に此の様な茶室が形態的にも完成されるに至つたとすべきであつて、彼は早くも天正十二年の正月三日山里の御座敷開きを行つて居り、以後、遠來の賓客や重要な使臣が大坂に來れば、必ず彼の天守閣の豪華に併せて此の山里の清寂を示し、また此處に於いて茶を供して居るのを見ても、如何に秀吉が此の境を愛し、それを持つことを誇とした程が察せられる。されば文祿の役が起

り、軍陣を名護屋に進めるに當つても、彼は此の山里の茶室を携行し、軍旅の情を慰めた程であつた。然し此の様な茶室が簡單に秀吉の持つた佗の茶道精神によつて獨創されたとするにはもとより問題があり、例へば堺妙國寺の日珖上人の自傳とも云ふべき「已行記」の天正九年の條には、「一、當年大坊小座敷造作在之、一、學問所茶屋大坊ヨリ引之」と記されるのを見ても、秀吉が大坂の城に山里を構へる以前、堺に於いては既に學問所の茶屋を持つ風が行はれて居たことを知る。更にまた此の頃茶屋を設けて茶の湯を行ふことが、堺の茶人の間に一の風をなして興り來つたとも思はれるのであつて、「津田宗及茶湯日記」^⑤には、天正五年の頃より、千宗易を始め今井宗久、荒木道彥、或は烏丸殿等が茶屋に於いて敷奇をなして居るのを見、單に秀吉に始まらず時代の風として茶屋の好尚が興起したことは明かである。即ち此の時に當つて「天下布武」の業略々成り、時代思想の急激な轉換も亦到來すると共に、茶の湯にあつても新に茶屋に於いて催すことが頗る喜ばれるに至つたと思はれる。而もな

は茶屋の茶の湯が此の天正の初年よりして始めて興つたと匆卒には決し難い。即ち此の茶會記に就いて年序を遡つて行く時、例へば津田宗達が永祿七年正月十一日に同族天王寺屋宗閑に招かれ、茶屋に於いて「セチ」を祝うて居る記事を見るし、別にこれ以前の事としては石山本願寺の證如上人が邸内の裏庭に茶屋を作り、定衆の一家夫婦にこれを見せ、一緒に栗の餅を食したことが、既に證如の日記の天文九年十一月に現はれて居り、其以後、屢々一家一門の人々か此處に集ひ、裏庭の藤花を賞で、共に茶を飲んで和樂して居る。此の茶屋にはまた竹亭とも記される様な形態を持ち、邊りには藤の花の他、躑躅山吹等も植ゑられてあり、清水のせゝらぎの音すら聞かれ得る清境をなした。而も此處では公式の賓客が迎へられることはあまりなく、一家同族の私的な親密な會合が樂しまれてゐたのである。伏見城の山里なる茶屋學問所が來るには、天正の初年既に此の好尚か復興して居り、更に其の以前に遡つては本願寺一門の家族共同態建立の場處としてあつた裏庭の茶屋が先蹤をなして居る事實を一應銘記

しなければならぬと思ふ。

此の様な茶屋の構造と、その由來や本質に就いて考を進めるに當り、それを考へる前提として、中世を通じての茶湯の發展過程に就いて一應の願慮を須ひなければならぬと思ふが、これに關しては私が不十分乍ら別に説いたものがあり、今その結論を摘要すれば、吉野時代室町時代初期の茶會が基本構造として併せ有つてゐた二契機、即ち茶寄合としての主情的共同態的な契機と、茶數奇とも云はれる主知的個性主義的な契機とが、室町中期に入つては、前者は庶民的な茶湯の會合、後者は武家殿中の規式や御飾を重んずる貴族的な御茶の湯にと分離した。然るに茶道の祖と稱せられる村田珠光が出づるに及び、彼は庶民的出自に出發し乍ら殿中の御茶湯の傳統を究め、而もその方向に一應徹することによつて、却つて庶民的茶湯の本質の再發見に還歸し、云はゞ彼に先行する兩契機兩傳統の止揚を成し遂げ、始めて此處に茶道の形成を齎し來つたと考へられる。

此の様な發展は茶湯の行はれる場所としての茶室の形

態に就いても表現されて居るのであつて、武家貴族生活に於ける殿中の御茶湯にあつては、その常住の殿舎の一部にある、會所或は對面所と云はれる公的な部屋に於いて、主君或は貴賓の前に茶が運び來られ献せられる。其處は唐畫唐物の寶器珍什を以て座敷飾されることは勿論であるが、茶具は普通それに近接する別室「御茶湯の間」と呼ばれる小室に用意され、其處に於いて茶が點てられるのである。之に對して庶民的な茶湯にあつては却つて臨時に庭中にその屋舎が假設された例を見るのであつて、應永の頃の雲脚茶會には谷河の井戸の邊に會所を構へ、其處に於いて種々結構されることがあつたし、同じく其の頃の盃蘭盆會の夜、光臺寺に催された茶接待と云ふが如き大衆的な場合には、既に茶屋が設けられ、それには座敷飾もされて居たことを知るのである。而して茶屋なるものは更に具體的には文明に降つて奈良で催された淋汗の茶湯の一例として、次の様な形態を取つて出現して居ることが注意せられる。

〔經覺私要鈔〕 文明元年八月廿六日條

山里の茶屋と學問の日本の形態

今日林間在之、長井北山黨燒之、風呂ノ外柴垣ヲ構テ砂ヲマク、風呂ノ軒ノ西ニ屋ヲ立テ、南破風在之、上ヲハ檜葉ニテ葺、其北茶屋ヲ作テ屏風ヲ立、内ニハ黒木ノ柵ヲ立テ、色々物ヲ置、酒海二在之、湯壺上ニ花少々在之、唐大食籠四重在之、事外結構也、(下略)

此處に圈點を施し、注意した様な素材清新な形態は、また桃山時代に入つて再興せらるべき茶屋にも共通する重要な諸點である。

大體以上の様な二つの系統の茶室形態が、珠光による綜合の結果として來る處は、如何であつたかを考へるに、直接珠光の營造にかゝる茶室の遺構とて無論なく、それに關する文献資料も確實なものを見ることは出來ないけれども、彼の思想によつて導かれたに相異なる下京なる村田宗珠の茶室に就いては、「門に大なる松あり杉あり、垣のうち清く、蔦落葉五葉六葉色濃」き風情を持ち、(宗長手記)これはまた、「市中隱」或は「山居之體尤有」感(「二水記」と評せられる如く、これを外より眺むれば

三

ば、彼の柴垣を廻らし砂をうち清めた淋汗の茶屋の如く、自然の閑境にある趣深い外貌を持つ。然しその室内に入ると別に「數奇之小座敷」と云はれる語の恰當する如き、殿中生活的な構造を顯著に含む機構のものとなつて居り、それは其の中心部分をなす御床に飾られて一座の者より跪坐し拜見の禮を受くべき唐物名物の貴族性に調和すべく作られてゐたことを看過することは出来ない。

簡單に云へばそれは眞なるものを内に包む草なる形を執るものであつた。此の様に外は自然的山家的風體を裝ひ乍ら、内には人文的貴族的核心を藏すると云ふ形體が、聽て珠光以來利休に至る間の初期茶道の基本的な精神の姿であり、それはまた自由な行動に馳せつゝも他面なほ絶對的權威に依附せざるを得なかつた室町文化の兩極的な精神構造に通ずるものであつて、これが打破は安土桃山の新しい時代の到來を待つ他なく、茶室に關して具體的に云はゞ、山里の茶屋の好尚の昂まることによつて到達し得たと思ふのである。

今や山里の茶屋は茶室形態の上で珠光以來の初期茶道に一大轉機を劃すべく到來したと考へられるのであるが、其の來る意味を考へる爲、先づ茶道の相が此の時期に於いて具體的に如何に變り來つたかを見、その根柢に流れる精神の變化をこれに思ひ併せる上から、此處では先づ當時の茶道の第一人者であり、此の道の古今無雙の名匠と云はれる利休居士、千宗易が自ら行つてゐる茶會の仕方の上に現はれる變異より、それを考へようと思ふ。

元來村田珠光より紹鷗を経て利休に至る初期茶道は、云はゞ「武家累代之重寶」或は「東山殿御物」たるの思念によつて推重せられる唐物名物を樞軸として展開し來つたとも云へるのであつて、其れ故、名物の鑑識（目利）は茶人の最も重要な資質でなければならなかつた。されば此の時代の茶會記が名物に關して記載すること最も詳しく、津田宗及の如きは別記として「道具拜見記」の詳しいものを編し、利休も亦壯時にあつて自ら實見した名物

茶入の切型を残した如き、何れも鑑識の鍊磨に對する強い傾倒の一端を示すものと云へるが、更に名物所持の如何は茶人の資格の上にも決定的な意義を持つものであつて、「山上宗二記」^⑩によれば、目利であつて唐物名物を所持し、數寄の師匠をなす者は「茶湯者」と云ひ、名物を一物も持たず、「胸の覺悟一、作分一、手柄一」を以て世を渡る者を、「佗數奇」となし、唐物も所持し佗數奇の覺悟をも兼ね備へた者が、はじめ「名人」と呼ばれ得るとする。此の名物無しの佗數奇に當る者としては、栗田口善法が擧げられて居るが、名ある茶人として此の様な在り方を持つ者は極めて稀な存在であつて、同記に載せる茶人の略傳にも、僅に彼一人が見られるに過ぎない。而して名物所持の所謂茶湯者或は數寄者と云はれる中にも自ら二種類に分れることが見られ、即ち一は「名物數多所持」の人々、他は「名物一種ヲ樂シム」人々であり、而して更に「古人ノ云、茶湯名人ニ成テ後ハ道具一種サヘアレハ佗數奇スルカ專一也」と云ふよりすれば、後者の如きも廣義に於ける「佗數奇」として考へられてゐるので

ある。前者に屬する者には古市播磨・引抽・武野紹鷗・津田宗達があり、此等の人々はまた名人としても考へられて居る。これに對し、四十石ノ名壺一種所持の千本の石黒道提、珠光の後嗣宗珠、鶴の一疊の花入一種の藤田宗理、松本文琳茶入一種の譽田屋宗宅、玉圃枯山の繪一種の棟宗理等が他の一群即ち廣義に於ける佗數奇の茶人である。扱、茶道の開山と云はれる村田珠光は、先づ唐物數多所持の名譽を得、然る後一種所持の境に到得したと云ふ經驗を持つと考へられ、山上宗二記に云ふ「古人ノ云、云々」の語は其の儘、珠光に於いて當嵌まると思ふ^⑪。其處に初期茶道の開山として、それ以後の發展を導いた彼の存在意義の深さを思ふべきであらう。

扱、安土桃山時代に於ける天下の三名人と云はれる千宗易・津田宗及・今井宗久の中、津田宗達の子である宗及、武野紹鷗の女婿たる今井宗及が、名物數多所持の茶人の系流に立つは云ふ迄もないが、此の二人よりも更に強く時代の茶風を動かし、文化に貢獻する處のあつた千宗易は、然らば何れの系流に屬すべきや。それは彼が實

際行つた茶の仕方を見ることによつて決めることが出来るよう。

利休が早くより茶の道に志したことは、十七歳の時、

北向道陳に就いて茶を習つたと傳へられることによつて知られるのみならず、實際彼は既に十六歳にして京都に在り、茶道にあつては奈良の名門である松屋久政を招じて居ることによつても窺はれる。それ以後久政久好の茶會記を始めとし、津田宗達及び宗及、今井宗久、神谷宗湛等の會記によれば、幸にも、彼の生涯に汎り殆んど中絶の時期なく、數十回の彼の茶會を見ることが出来、特に晩年には彼自身の手録より抄記したと云ふ南方録の宗易茶湯日記や、彼の最後を飾る「利休百會記」があり、此等によつて彼の茶道精神の内的な發展を探索する手掛を得ることが出来る。今それに就いて詳しく説くことは他日の機會に譲り、要するに、彼の茶會には大體三つの發展階が考へ得ると思ふ。即ち凡そ天正の初年迄を前期、以後天正十四五年に至る間を中期、最後に晩年の數年を後期と考へ得る様な精神展開の事實が其處に見られ

ようと思ふのである。而して此の前期より中期に變移する過程に關聯して、山里の茶屋の問題が考へられるかと思ふ。

扱、前期に相當する彼の青少年期より壯年も漸く終らんとする頃迄の可成長期の間の茶會に特に注意せられることは、或る特定の道具に限り賞翫愛用されること特に著しいものがあり、而も此等の道具は次の時期に入れば却つて等閑に附される事實を見ることである。即ち、それは

一、細口の紫銅無紋の花入（鶴の嘯たと呼び來られ、利休が「鶴の一聲」と銘した。）

一、姥口の平釜

一、手桶の水指

の如きものである。就中、「鶴の一聲の花入」は前にも觸れた如く、名物道具の目利を以て稱せられた下京の茶人藤田宗理の一種所持して居た名物であり、松屋久政が上京に際し、十四屋宗悟や針屋淨貞の會と同時に、未だ十六歳の若冠であつた千與四郎の會に招かれてゐるのも、

その意とする處は多分此の名物花入の拜見にあつたかと思はれ、宗易が茶道界に名を成し得た所以の一つも、此の名物一種の所持に於いて考へられるのである。更に注意すべきことは彼がこれを用ふるに花を生けず、此の器ばかりを床に飾つて居ることである。即ち此の細口花入に水ばかり入て長盆に置いたり、^{②①}薄板に載せて初座より飾つたり、或は客の前で外袋をとり、客に親しく一面せしめて後、薄板を運び出して床に上げるなどの取扱をして居る。恐らく此の様な取扱は、此の器に於いて單なる茶具として考へるよりも、名物としての價値が重く思念せられ、更に宗易が此の名物一種所持の茶人としての立場よりして、特に斯かる取扱をなしたとも考へられる。

然るに中期とせられる彼の茶會に於いては、もはや斯様な名物賞翫の取扱を止め、花器として是を用ひて、柳、白梅、蒲などをこれに生けて居るのを見、^{②②}彼の子道安も亦、是を用ひて矢張花を生けて居り、^{②③}花器だけを飾る扱ひは見られない。斯くして、漸て天正十七年の頃には此の花入は彼の所持をも離れて重宗甫の有に歸してしまつ

たことにも、^{②④}此の名物が彼の前期の茶湯に持つて居た重要性を喪失し了つたことを知るのである。

姥口の平釜と手桶の水指に就いても事情は同様であつて、宗達の會記に天文二十四年彼は「ツリ物」として平釜を用ひて居るを初見とし、爾後天正四年に至る迄僅か一會の例を除き、此の平釜と手桶の取合を以て終始一貫して居ることが見られる。また宗及が往々宗易の會について「茶湯如_ニ常住_一」とか「茶湯いつもの如く」などと略記して居るのも、特に客の賞翫に供すべき道具の他は、平常、略々定まつた什具を以て茶を催して居ることが考へられる。以上のことを思へば宗易は、吾人の云ふ彼の前期の茶會に於いては所謂名物一種所持して佗數寄を樂しむ側の人として立つて居つたことは愈々以て明かである。而もなほ、此の平釜とは嘗て引拙が所持して彼の臺子の四飾の内に取合されてゐたとされるものであり、^{②⑤}手桶も亦、珠光の用ひ始めた時は木地の儘であつて日常的素朴性を帯びたものであつたのに對し、紹鷗利休に至つては眞塗のものに改められ、遂に臺子にも嚴られ得るも

のに昂まつたと傳へられる。斯くて利休の前期に於ける茶は簡素ではあり乍ら未だ名物と臺子の權威より逸脱し得ない珠光以來の所謂初期茶道の傳統につながるものであり、その根本的な性格に於いて室町文化的であつたと云ふべく、又、彼の獨創をも多く見ることは出来ない。

然るに彼の中期の茶會では、此の燒口の平釜は既に他人に譲られて、新に大の霰釜が好まれ、手桶の水指に漸く後退して、備前信樂等の土の物の水指、或は釣瓶などが採用せられて居るのみならず、「茶の湯いつもの如く」と云ふ様な定つた道具組によるのではなく、會毎に常に種々の違つた道具が登場すると云ふ茶風に一變する。即ち利休の茶湯にあつても舊い傳統が權威を失し、新時代を建設すべき機運の勃興が顯著に現はれて來るのである。

四

此處に於いて、茶の湯の世界に於ける舊觀念の打破、新精神の興隆を著しくも促進する契機として、此處に

「茶屋のルネッサンス」とも云ふべき好尚が昂まることを考へねばならぬ。此の風は先きに見た如く、特に天正の初年より鬱勃として興り、取り分け新時代を擔ひ立つ武將の茶人に喜ばれる處となつた。これに就いても、利休は天正五年早くも茶屋を作り、閏七月七日に松江隆仙、天王寺屋道叱、津田宗及等堺の茶人としては宿老の人々を招いて茶屋の開をして、時尚に先鞭をつけて居る觀のあるのは、彼が如何に時運の動きを先取るに敏であつたかを察するに足るものである。此の時の茶湯に就いて見ると、先の釣物の大の霰釜を五徳に据ゑ、飯銅の水指、小鳥の天目、高麗茶碗、聚の茶器、面桶の水こぼし等何れも特に名物とは云はれない品々を蓆棚の中より取出す作意をなして居るが、此の取合せを一見するも茶屋の茶湯が「名物拜見」と云ふ如き緊張を伴ふものでなく、自由安易な氣分に於いて樂しまれるものとして來たことが考へられる。斯くして、「唐物代物ノ高下ニヨラス、御床ニ嚴ル御道具ヲ名物ト云」（山上宗二記）と考へられてゐた様な名物の觀念を遂に無視し了つた茶屋の精神にあつ

ては、床の構を持たないことを普通とし、定家の色紙さへ壁に直に掛けると云ふが如き、全く大膽な試みをも爲し得、また却つて其の様なことが喜び迎へられる場所としても現成した。

茶屋の世界が包擁する此の様な精神に就いては、尙、その具體的な構造を觀察しつゝ、これを説くべき興味ある諸點があると思ふ。もとより茶屋の茶湯が茶道の舊傳統よりの自己解放を生命とするものである以上、その構築の上にも定まつた規矩としてはなくして、即興的に自由な假構せられた趣を存するを寧ろ特徴とするものではあつたと思はれるが、大體の形態としては今日時雨亭の遺構などに見られる如く、黒木乃至は丸太造であり、屋根は青い萱葺、壁は荒壁の儘なる素朴な姿を持ち、その内部も恐らくは壘を敷かずに板間と土間とより成つて居るのを原則としたかと考へられる。此の様な形態を顯著に示す例と見られるのは、天正十六年三月、神谷宗湛が博多名島の松原の中に設け、小早川隆景を招いた時のもので、即ち、「トマフキニカコヒ仕、壁ハ青柴ニ、シトミ

入ノ路地ニハ岩ノ上ニ道ヲ取ナシテ、茶屋ノ内ニハ石ヲ立、釜ヲスヘ」た風體を持ち、これが大いに隆景の意に適つたと云ふ。斯様な形は既に見た淋汗の茶湯に作られた茶屋と全く相似たものであるし、尙ほ古く遡れば、元正上皇 聖武天皇が長屋王の佐保の宅にいでまし、その肆宴に於ける御製として、

はたすゝき 尾花さかふき 黒木もち 造れる室は
萬代までに

青丹よし 奈良の山なる 黒木もち 造れる室は
ませどあかぬも

ど御心を深くも寄せたまふた黒木造の室屋にも通ずるものがあり、それは悠久なる古今を通じ、上下貴賤を兼ねて我が日本人に抱かれて居る「永遠なる理想的生活」の象徴的形姿であつた。それと共に、此の様な形態に於いては、また、古より今に通じ、今より古に還歸する我が祭事の生活が、強くもこれに思はれるのであり、此の茶屋の構造には、踐祚大嘗祭の齋庭の御有様が「構以黒木、葺以萱草、以檜竿爲天井、席爲承塵、壁藪以

草、表裏以_レ席、地敷_ニ東草_一、上加_ニ竹筵_一とし、廻らすに柴垣を以てしたまふに拜する御形態に比べ申し得ることとは長き事ではあるが、これよりしても神ながらの我が祭事に於ける齋場、乃至は精進屋、神宿などと云はれる物忌み清められた別世界が、山里の茶屋なる境に於いては現前し得たと考へられ、此の祭事共同態に於ける精神の昂揚が山里の茶屋に於いてもあつたと想到せられる。茶道に云はれる「清寂」の意味も、斯くして始めて此處に考へることが出來、應てはそれが「和敬」の精神に併せて唱へられることも、斯かる祭事共同態的精神構造を基礎に考へることにより、此の理念の來る所以をよく理解し得ると思ふ。

茶屋の構造に關聯しては、彼の名島の松原なる茶屋には、石を立て、釜を据ゑたと云はれ、茶屋に關する文獻遺構共に、常に「竈」の設備を持つことが見られることである。

「竈に神在ます」と云ふ心意は今なほ我々の間にも抱かれて居ることより推しても、古代人が如何に此の信念を

固くして居つたかを察し得られる。火と水とが萬物の生育には不可欠な要素であり、而して竈は直接我々の生命を支へる食物を作る設備たることによつて古代人にその靈威の崇められることは當然であるが、尙ほそれには祭を行ふ場合、神人相饗をなして、神人融和を來たす上に最も重要な「黒酒白酒の大御酒」「天つ御膳の長御膳の遠御膳」を調へ參らせる上に、その成香の鍵が此に懸つて居たからでもある。蓋し伊勢の齋宮が野の宮に入らせらるゝに當つては、先づ忌火、庭火、御竈井の神々の祭があり、以後毎朔日にも二竈の祭をされたと云ふ一例を見ても、祭祀に占める竈の位置の重大さの程が察せられる。茶屋の持つ竈に就いてこれを思ふに、確にそれは茶の湯の主客共同態建立の上の重要性に於いて重視せられ、それが備へられてあると思はれ、彼の數寄の小座敷では名物を嚴る御床を核心としたに對し、此の山里の茶屋にあつては茶の湯を滾らせる竈こそ、その中心をなしたとも云へよう。

斯くして主客共同態建立の上に「茶の湯」の心を深く

悟り、主客相應の上には火相湯相相當すべきを特に強調したのは、利休の茶の精神として來る處であつた。南方錄には利休が津田宗及住吉屋宗無の如きも此の點に於いては未だ味得の不徹底なるを指摘した後、「抑茶ノ湯ト云名ハ何ノ爲ニ付候ヤ、茶ト湯ト相應第一也、草庵ニテ初座ノ火相ヲ考へ、後座ノ湯相ニ應シテ座ニ入、茶ニ逢ヲ功者ノ客ト云、又其客ニ應シテ湯相火相相當シテ茶ヲ點ルヲ功者ノ亭主ト云也」と南坊宗啓に教へる處があり、南坊モ亦「夫ヨリ益々此心ヲ專ラニシテ見來レハ、炭ノ次第ヨリ初テ一座一會ノ心、只火相湯相ノミ也」と自得したことを記すが、茶と湯の相應を深く思ひ、湯相火相の重きを機として主客合一の境を現せんとする心は、確に神人融合に過なきを期し、祭の事に慎しみ齋まはり仕へた人の心にも全く等しいものがあり、また自然の生動と共に生きようと思念した古人の心は、湯相火相とも呼吸を一つにせんとする利休の茶の精神として、此處に甦つて來たことが見られるのである。

五

斯くして共同態的精神を強く持つ新なる佗の茶の湯が、「山里の茶屋」を契機とし、利休をその指導者に立てて興隆し來る時、茶道の世界には從來とはまた異つた諸相が展開し來るべきは當然であつて、例へば茶室に就いても從來の定型的な茶室（數奇の小座敷）の傳統が破られ、此の山里の茶屋が指示する新なる方向へと次々に目まぐるしくも展開した。天正十六七年の頃山上宗二は述懐して、三疊敷は紹鷗の時迄は名物道具無し佗數奇のみ専ら作つた處であり、一種でも所持の人は四疊半に作つた。これに就いては宗易は別に意見を持つては居つたが、尙紹鷗歿（弘治元年）後二十五年は變化はなかつた。然るに關白様御代に當つて十ヶ年の内に上下共に三疊敷二疊半敷に建てる様に一變したと述べて居るのは正に此の事を云ふのである。而して此の茶室の平面の急速な發達に就いては、澤島英太郎氏の明快な考察があるが勿論それと共に、其の他の細部にも自由な發達を齎らし來た

ことは云ふ迄もない。斯くして、名物を嚴るが故に權威を持つた四疊半茶室の諸規定も亦後退し、其れに對する自由なる變容をも許すまでになつた。遂にはそれは、「自在へ紹鷗田舎にて見立て、始へ茶屋に掛けられしを、宗易四疊半に可然由相談ありて四疊半にかけられしと云々」(南方錄)の如き傳あるに見ても、「茶屋」の精神が遂に傳統的なる數奇の四疊半に迄、浸透し得るに至つたことを知るのである。

茶湯の世界に共同態的な精神が強く昂まると共に來た事實として更に注意せられることに、茶を點てる動作、即ち「てまひ」への注視の強まることが見られる。それは前代の茶道が名物の鑑識を重視したに交代して、新に昂まり來つたものと思はれるのであつて、先きには茶及の道具拜見記や利休の名物茶入切型を注意したことがあつたが、今や新しい世代に入つては神谷宗湛の如く、彼の參會する處の茶會に於ける亭主の所作を巨細に別記を作つて録して居り、或は「天正拾六年九月四日朝於聚樂利

休居士臺子之茶湯^①と云ふ本覺坊選存の茶會記には、此の時利休の行ふ「てまひ」の有様を克明に記録されて居る。また「(寫津義弘)惟新様より利休之御尋之條書之寫^②」を見ても、質問應答の内容は、茶碗の拭き方、釜の掛けおろしの仕方、濃茶薄茶の湯の波み様などと云ふ所作に關する細かい質疑に始終して居り、此の様な事例は他にもなほ見られると思ふが、是の如く「てまひ」の注視や關心が頗に強められたことは、共同態的な一座建立を強く思念する新時代の茶の湯の興隆によつて始めて來る處であり、亭主の茶を點てる動作には、恰も祭事の神樂や田樂の舞が神人和樂の興奮に誘ひ込む上に最も重要な役割を持つたと同様な意義が此に思はれたからであると考へるの他はない。従つて「てまひ」と云ふ言葉も、從來「點前」或は「手前」などの字を宛て、考へられてゐたもの、眞義に於いては「手舞」であるべきであつて、何々の舞とか、何々の手などと云はれる神舞の手振にもひき宛て、茶を點てる動作が思はれた結果であると思ふ。

六

以上の如く山里の茶屋より導かれ考へられる茶の湯の精神が深く共同態的な祭事の精神と連帶するに就いては尙ほ、安土桃山の新しい時代が開け、更には其處に日本古來の傳統的精神の復興が考へられることに就き、なほ説くべき點がある。

東北の雪國には正月の行事に子供達が小屋を建て、或は「かまくら」と云ふ雪で籠の形に造つた小室に籠り、客を其處に迎へ容れて、餅を焼き甘酒を汲んで夜を明かし、共に山の神田の神水の神を祭る風があり、また鳥追の小屋を焼いて火の祭をなし、新しい農事の幸を祝ひ且つ占ふ習俗があると云はれる。^⑩更に三河北設楽郡の山間の諸部落では舊冬新春の端境の節、降る雪に閉ぢ籠められつゝも夜を徹して華やかに行はれる有名な「花祭」があり、即ち此の祭は「花宿」に宛てられた祭場の家の上段にある「神座」に向つて、その前の土間即ち「舞戸」に於いて、中央にある籠を中心に、先づ湯立ての行事を以

て一同を淨めた後、宵より一夜を籠め翌朝に至る迄、種々の神樂（舞）が敷を盡して行はれ、遂には鬼の出現にも至つて興奮共歡が頂點に達すると云ふ。^⑩此の様な有様にこそ、天石窟の前の神樂の古が如實に此處に現じて居るとも云へるのであつて、それは神人共樂のわざによつて長夜の闇をひき明ける曉を呼び起すべき呪法であり、寒い冬の幽暗を破つて、新しい春の曙光を甯らし來たすべき行事として、それは奥深い雪の山里の生活に取つては取分け切實な意味を擔ふが故に、今もなほその古習が固く保有されて居るのであらう。山里の茶屋更には佗の茶の湯が此の時代に喜び迎へられたことにも、また同じ様な意味に於いて考へられるべきものがあり、それが室町季世乃至は中世の久しい幽暗を打破り、新しい天下一統の世の開け初めんとする天正の初年に復活し來つたことには、その共同態的な祭囃氣の興成によつて、花やかな希望の春を迎へ來たさんとする時代の心意が強くこれに動いて居ると考へられる。

これに關して、紹鷗が佗の茶の湯の心を定家の

見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦のとま屋の秋の夕ぐれ

の心を以て示したに對し、利休は家隆の作である。

花をのみ待らん人に山里の

雪間の草の春を見せばや

の歌を以て意を示したと云はれることは有名な話であるが、これまた雪の山里に春を待ち「花祭」をする人々の心と思ひ合せるによつて、その意が察せられもするし、それと共に考へられることは、明かに前代の侘とは異つた志向を持つ新しい侘の喜びが、今や利休に於いては興りつゝあることが看取せられる。即ち紹鷗の引く浦の苦屋の歌には沈み行く晩秋の寂寥たる光景に思を寄せる客觀的觀照の態度に止まるものあるに對し、此の雪の山里には雪間の草と共に萌え出でんとする春の生動と共に、自然との共同態的な關係を持つて動く心意、主體的な行動の意識が根柢にあり、またそれが謳歌せられて居ると思ふ。山里の茶屋が斯かる自然との關係の如何に深いかは、その構造や景致について既に述べた處を見るも明か

なことであるが、雪の山里に於いて強く來る自然の神々との親和、神々と共に新しい春を迎へ來たす喜びに於いて、侘の茶の湯はまた古來の祭事共同態の精神と斷ち得ない關係を持つて居るのである。

七

茶道にあつては特に冬の季節を選んで、宵より夜更に及ぶ夜咄よだつの茶事、また夜半より明け方の景色を喜ぶ曉の茶湯が催されることがある。此の様に冬の夜を更かし明かす茶の湯は、また夜咄が夜込よごまの茶の湯にも云はれて居るよりしても、夜ごもりの祭事を守り樂しむ心意よりもこれが來ると考へらるべきを持つて居る。夜の茶の湯が安土桃山時代に入つて特に意義を大きくした所以は一には其處に考へられるのであるが、尙その事に即してまた、茶の湯が歴史的な學問を温める場所にもなつたことを思はねばならぬ。即ち夜を籠めて行はれる年々の祭に於いては、新しい春の黎明を喚び起すべく現に行はれる神樂の歌曲舞踊にそのまゝ、古い昔が見られ聞かれるの

であり、それと共にまた、古事が語られ、神の賀詞が述べられることによつて、神の代への懐想が新しくせられ、此の神事の由つて來る根據が尋ねられると共に、更にその共同態の新しい世の進むべき道が示される。此處に歴史の生誕が來り、古事記、古語拾遺の如く其の名のまにまに己が成立の淵源を語るものが來る。更に中世に降つて數多く存する説話集の如きも、新興の鎌倉武士が古來の氏族制度的な精神を復興する此の時、矢張その共同態的な寄合の席上で「今は昔」と語り出された古い話に、その成立の地盤を持つて居たと考へられる。即ち、

此等の説話は單に過ぎ去つた古の事實を述べるのではなく、直接彼等の生活に結びつき、所謂文章經國の學とは異つて、彼等の共同態的な生活を訓へ導く生きた學問としての使命を持つたのであり、それは聽ては古事談古今著聞集十訓抄に見る如く、その綱目が分類せられ、學問的な體裁を整へるには、倫理的な徳目に依つて、それが考へられ、更には十訓と云ふが如き表題としてもその態度を表出するに至るのは當然な歸結である。此處に考へ

られることは、共同態的な生活の學問として來るものは、思辨的體系的な形而上學ではなく、具體的な歴史の事實に相即する倫理學であり、またそれが我が學問の傳統的な形態であると考へられることである。これに關して想起せられるのは源實朝の制した學問所番の事であつて、彼は昵近の候人中特に藝能之輩十八人を撰んで結番せしめ、當番の日は御學問所を去らずして隨時諮問に答へ、また和漢の古事を語らしめたと云ふ^⑩。而して是には既に以前より武家社會に傳へられてゐた學問の在り方が此の時に當つて制度化され賦形されたものと考へられるが、秀吉の建てた「學問所」の性質も亦、此の鎌倉の先蹤に併せ考へらるべきであらう。

それに就いては、恰も學問所番の如く、戰國近世初頭の武將の身邊に絶えず侍し、その間に應じ、和漢の故實を語り、種々の藝能を發揮した「御伽衆」の存在を思ふべきである。これに關しては桑田忠親氏の研究「大名と御伽衆」があり、お伽の狀況、その歴史的變遷、お伽衆個々の人物と關係、更にそれに就いて近世の覺書聞書等の

歴史的編纂物の成立、咄の本お伽草子の源泉等に就き詳しく調べられて居るが、其の發祥に關して氏は「戰陣の際の伽に在つたと思はれる」とし、「戰陣の雜談は泰平の世の閑談とは自ら異なるものである。兵馬倥傯の間に將卒の思想を統一し行爲の規準を形づけるものが咄であり、咄によつて之をなすが、最も手つとり速かつたし、またそれによる外、他に方法も少かつたであらう。」と云はれて居る。もとより戰陣こそ最も相依相助の共同態的精神の昂まる時である。けれどもお伽或は夜咄と云はれるものが、斯様に戰國武士の精神統一の機とし、當爲の方向を示すものとして戰陣に採用せられる根柢には、寧ろ古來の氏族制度社會的な祭事共同態の精神に淵源してこれを考へることが出來よう。而してそのことに於いてまた、此の時代の茶の湯と夜咄とが最も親しい同胞的な關係にあることが思はれるのである。

これに關しては桑田氏の著書に引かれて居る「有馬伯爵家文書」の中にある、秀吉がその御伽衆の一人たる有馬刑部卿法印(則頼)に宛てた朱印狀に於いて、則頼の病

氣を顧慮して「一、其方相煩付而、來年三月迄、茶の湯夜はなし、不可仕之事、一、誰々茶の湯夜咄によび候とも、ゆくべからず候、呼候ものも、又その方へゆき候者も、可被及曲言事」と嚴しく養生を勧めて居る中に見られる如く、茶の湯と夜咄とは同一な世界を共有すると考へられ、されば夜會の茶の湯が「夜咄」の名で呼ばれる様になつたのも當然な結果と思はれるのである。それと共に、所謂お伽衆の中には、武功を積んだ録達の士と共に、茶の湯を特に好み、數奇者として却つて名を残した武人を多く含み、其等が茶の宗匠と共に衆中の有力な分子をなしてゐたことが特に注意せられる。此の事實は別して秀吉のお伽衆に於いて著しく、文祿元年三月秀吉の名護屋出陣に従ふ御咄衆として太田牛一の「大かうさまくんきのうち」に見える、二十一人の連名には、萬代屋宗安、住吉屋宗無、今井宗薫、武野宗瓦等堺の茶匠と共に、佐久間不干、金森法印、織田有樂、青木法印の如き茶の數奇に於いて特に名を残す武人があり、慶長三年に於ける秀吉の御伽衆として「甫庵太閤記」に見られる二

十二人の中にも、織田常眞、織田有樂、有馬法印、桑山法印、古田織部、佐久間不干、住吉屋宗無の名が見られ、彼の「學問所記」の作者西笑承兌もそれに數へられて居る。更には千利休の如きも彼の御咄衆に數へられてゐたと云ふことである。^⑤

斯の如き事實よりすれば、茶の湯の席が夜咄の語られる場所でもあり、夜咄をし乍ら茶を點て、主客融和し、主従親睦しつゝ、武士的教養を高めたであらうことは最早疑の餘地がない。而して、此の様な世界を建立するに最も適しい境地として「山里の茶屋」が來り、乃至、それに導かれて發達した佗の草庵としての茶室が宛てられたのであり、此處に、承兌が記して是を「學問所」と呼び、其處に集ふ茶人を「學問之徒」と稱した所以も、お伽の世界を考ふるに於いて始めて理解し得るのである。

斯くして茶の湯が過去の歴史、人間の行爲が問題とせられる夜咄と共にあつたことによつて、茶道に於いては歴史的な關心、歴史的な思考がそれに持ち込まれる。例へば茶書に就いても「茶具備討集」や「茶器名物集」が

前代的な茶書の典型とすれば、新に來る處は「南方録」や「喫茶雜話」と云ひ、「長閑堂記」や「松花堂上人行業記」の如き説話的要素を多分に含むもの、傳記的或は箴言集的形式を取るものが次の世代には登場する。それと共に名物の茶器に關しても、單に「東山殿御物」として曾て一度は武家の殿中に入り貴族性を賦與せられたことに満足する庶民の心意に止まることはなく、茶器の由緒來歴を具に問ふ歴史的な關心が、更にその上に加はり來り、茶器の傳來が尙ばれ重んぜられる風を興したことも、戰國武將の參與による、お伽夜咄の世界の茶の湯への導入に由來したと思はれる。

八

以上、伏見城の山里の茶屋が、四圍の自然の生動、農村生活の營みと共にあり、而もそれは「學問所」として建てられたことに就き、元來此の様な茶屋の形態は古く庶民的共同態的な茶會に起源すると共に、此の時代の茶道が時代の新なる精神傾向に即することに於いて、祭事

共同態的な性格を強めたこと、而して此を逆に云へば、茶の湯が悠久な歴史を持つ日本民族の共同態的な生活を基底とし、それに遡源することにより新なる世を興し來るべき力ともなり、またその事に於いて、自然との深い親和の關係に入つて、此處に新なる佗の茶の昂揚を齎したことを述べた。それと同時に、新しい行動の世界を開き、新しい社會の建設に向ふべき爲の倫理的規準が、恒に己が共同態の由來せる歴史を回顧し、その行績の中に求めると云ふ日本特有とも云ふべき傳統的精神に基き、茶の湯は特に武將の生活に於いて、夜咄の世界とも合體し、一座一會の中に歴史的な倫理が喚び起される學問の世界としても現じ得るに至つた經緯を述べた。

而して此處に至つて茶道自體も、茶の湯の心の在り方を共同態的な倫理の中に求め、共同態的な混融の中に、自らなる條理の凝るものあるが波み上げられ、近世封建社會に於ける新しい古典とも云ふべき茶道が此處に成立する。尙、それを利休の茶に就いて云へば、凡そ、先に述べた彼の茶會の展開に於ける後期、即ち彼の最晩年の時

期にその完成があると思はれるのである。

以上甚だ蕪雜乍らも兎も角此の稿を纏め得たのは一に平素出入する國史研究室關係の諸先生諸先輩の御指導御誘掖の賜である。取分け、幸にも西田先生の御講義に參席するの機會に恵まれて伺ひ得た貴重な御教示が、本稿成立に重要な動機ともなつて居ることを特記し、爰に其等の深い學恩に報ひ申すこと甚だ不十分なることを慚愧しつゝ筆を擱く。(昭和十九年三月卅日)

註① 續群書類從文筆部所收

② 鹿苑日録刊行本卷二所收

③ 甫庵太閤記卷十六

④ 桑田忠親氏「北野大茶會と山里の茶亭」(叢談、五十二)

⑤ 津田宗及茶湯日記(他會篇)として近時刊行されたものは津田宗達、宗及、宗凡三代の茶會記を収めるが、以後本稿に於いては「宗達會記」「宗及會記」などと夫々の部分を略稱する場合もある。

⑥ 茶屋が正月の「おせち」を祝はれる場所として用ひられて居ることは、その意味を考へる上にも注意すべきことゝ思ふ。

⑦ 證如上人日記(石山本願寺日記上卷)の記事による。

⑧ 日本文化史研究所收、拙稿「村田珠光と茶會の傳統」

⑨ 例へば「君臺觀左右帳記」「御飾記」等(何れも群書類從遊戯部所收) 参照のこと。

武家の亭中に茶室様の小座敷が設けられ、其處に茶湯棚等が置かれる様になるのは、寧ろ初期茶道發達の結果であつて、即ち天文三年の淺井備前守宿所發應記(續群書類從武家部所收)や、永祿四年の三好筑前守護長朝臣亭え御成之記(群書類從武家部所收)に始めて現はれる。但し相阿彌の御飾記に見える義政の持佛堂四帖半敷の飾は唯一の例外であつて、これに就いては改めて他日の機會に問題としようと思ふ。

⑩ 看聞御記、應永廿四年六月五日

⑪ 同 應永卅年七月十五日

⑫ 前掲、拙稿「村田珠光と茶會の傳統」特に第六節

⑬ 南方錄(茶道全集卷の九所收)に「四疊半座敷ハ珠光の作事也。眞座敷とて鳥子紙の白張付、杉板のふちなし、天井小板ふき、寶形造、一間床也。秘藏の四悟の墨跡をかけ、臺子を飾り給ふ。其後爐を切て及臺を置合されしなり。床にも二幅對の掛幅、勿論一幅の繪をかけられしなり。前には卓に香爐花入、或は小花瓶に一色立華、或ハ料紙襖箱短尺箱文臺、或ハ盆山葉茶壺など、これらハ專飾られしなり。」と云つて居るが、此の傳ほどの程度迄珠光の茶室の眞

相を傳へるかに就いては検討を要するとしても、茶器名物集や山上宗二記に、紹鸚の持つて居たと云ふ四疊半は矢張、天井は小板ふき、檜柱で、壁は眞の張付で黒縁があり、床框もかき合に黒く十反程も塗つたものであると云ふのを見れば、これが此の時代の茶室の傳統的な型態であつた。而して此の様な型態の小座敷は既に珠光の當時にも存在したことは三條西實隆が連歌師玄清の斡旋により買得移建したことが實隆公記の文龜二年の夏より秋にかけての記事に見られるのであつて、これは既に西堀一三氏も注意せられた處である。(茶道全集、卷の五、「珠光研究」)但し實隆が此處に於いて茶會を催した記事はその日記中に見ないのであつて、彼がこれを果して茶室として用ひたかは直ちに決し難い。實隆は之を求めて、最初六帖敷であつたものを之間座敷即ち四帖半に改め、(西堀氏は此の改修には豊原統秋の意見が加はつた如く云はれて居るが、實隆の記に據る限りは其の様には見えない。)小壁は白壁とし、押板や糊の前は唐紙師を呼んで張らせ、庭には石を立て、小樹を栽え、大工を呼んで板垣などを作らせて居るのは當時の小座敷の形態を知る興味ある資料であり、これによつてまた珠光の四帖半と云ひ、紹鸚の四帖半ともされるものと極めて近似せるものが、既に現存したことを知る。

⑭ 津田宗及茶湯日記卷之四、「道具拜見記」。永祿九年より元龜三年に到る間、實見した名物の觀察批評所感を記す。

⑮ 現在大徳寺塔頭龍光院に傳存、これに就いては中村喜代三氏の「利休自作の茶入切型」なる論文が雑誌「徳雲」に發表され、後、茶道全集卷の九に收められた。

⑯ 堺市史資料編所収

⑰ 前掲拙稿「村田珠光と茶會の傳統」第六節

⑱ 南方錄

⑲ 南都松屋茶會記、天文六年二月十三日。

⑳ 宗達會記、永祿五年五月廿七日。

㉑ 宗及日記、永祿十二年十一月廿三日、同十三年二月三日

㉒ 宗及會記、天正七年正月廿六日、同年十二月九日、天正十一年九月十六日の諸會に於いて。

㉓ 宗湛日記、天正十五年三月十六日。

㉔ 山上宗二記。

㉕ 山上宗二記及茶器名物集。

㉖ 草人木(茶道全集卷の十二所収)

⑳ 秀吉に就いてはこれを言ふ迄もなく、尙、天正十六年、小早川隆景が肥前名島の海岸の松林の中に神谷宗湛の作り設けた茶屋の風情を大いに喜び、後文祿四年再び此の地に駐留するや、また博多衆に命じてこれを構へさせ、茶を樂しみ、將士に振舞をなす處があつた。(宗湛日記)又、荒木道薫即ち村重の如き、利休等と共に早く茶屋の茶を催して居る。(宗及會記)

㉗ 津田宗及茶湯日記によれば、永祿七年の天王寺屋宗開の

茶屋の記事(既述)以來、茶屋の茶湯は此の利休の會を始めとして再び登場する。

㉘ 宗及會記、天正六年十月三日、荒木道薫會。

㉙ 萬葉集、卷第八、此處に黒木の室を單に好しとながめたまふのでなく、その内に在まして「ませとあかぬかも」と仰せられて居る處に、平安朝人の外部より山里へ寄せる情とは異なることを注意すべきである。

㉚ 延喜式卷七及卷五。

㉛ 湯と同時にそれに宛てる水に就いても亦、「惣て朝晝夜ともに茶の水ハ曉波みたるを用ひる也、これ茶の湯者の心かけにて、曉より夜迄の茶の水絶ぬやうに用意する事なり、夜會にて晝以後の水是を不用、晚景半夜迄ハ陰分にて水氣沈みて毒あり、曉の水ハ陽分の初にて清氣浮ぶ井華水なり、茶に對して大切の水なれハ茶人の用心肝要なり」(南方錄)と水氣の陰陽に深く注意されることにも、彼の大嘗祭の御用水は神意に則つて、現し國の水に、天つ水を加へて奉られんがため、天の忍雲根の神が天上に登り、天の玉櫛を受け、此の玉櫛を刺立て、夕日より朝日照るに至るまで、天つ詔戸の大詔刀言を告り、斯くして弱縁にゆつ五百笠生ひ出で、其の下より天の八井出で、これを天つ水として開し食される由緒が中臣壽詞に説かれて居る如き、神人相助に成る水を用意して御酒御膳を造り、相饗に罪なからんことを期した心こそ、主客相應を期する茶の湯の水の

用意としても現はれて居ると考へられる。

③① 山上宗二記及び茶器名物集、(夫々天正十六及十七年の奥書を持つ)。

③② 茶道全集、卷の三所収。

③③ 宗湛日記、但し京大國史研究室所架本に依る。(これは神谷宗三氏藏本に、佐賀縣唐津町山内小兵衛氏藏本を増補せるものであり、云ふ處の別記は後者の一部をなす)。

③④ 東京美術學校所藏と云ふ。筆者は未見であるが、内容の大體は堀口捨巳氏の「利休の茶」(思想二百卅一號)及び桑田忠親氏の「千利休」(二二六―九頁)に於いて知られる。

③⑤ 大日本史料、第十二編卷第三十一、元和五年七月二十一日條所収。

③⑥ 東北の民俗(仙臺鐵道局編)、歲時習俗語彙(柳園田男編)の火祭と小屋生活の項等。

④① 早川孝太郎著「花祭」。

④② 南方錄

④③ 吾妻鏡、卷廿一、建保元年二月二日條。

④④ 大名とお伽衆、一、お伽衆に就いて、(三頁)

④⑤ 前掲 書、三、桃山時代諸家の御伽衆、(三二頁)

尙、此處に來年三月迄と云つて居ることによつても、大體夜咄や、夜の茶の湯が冬十二月から翌三月の頃の寒い冬の夜に行はれるものであつたことが推測出来るし、他面それは茶會記の記事などによつても實際に證せられる。

④⑥ 前掲書(四二頁)。